

2021年7月4日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書19章38～42節

説教題：できることを

「アルファ・コース」で聞いた話です。海岸に大量のヒトデが打ち上げられました。1人の少年が、そのヒトデを1匹、また1匹と海に投げ返していました。通りがかりの人が、少年に言いました。「こんなに凄い数のヒトデだよ。君が1匹、2匹のヒトデを海に投げ返したからといって、何になるんだい。何にもならないよ」。少年は、1匹のヒトデを海に投げ返しながら答えました。「この1匹にとっては大きな違いなんだ」。確かにそうです。講師のガンベル先生は、この話を紹介してこうコメントしました。「私達は大きな問題を解決することは出来ないが、出来ることをすれば良い。出来ることは必ずある」。大切なことを教えられる気がします。「自分に出来ることをやって行くという在り方がある」ということです。それは私達の信仰生活についても、示唆、励ましを与えるのではないのでしょうか。今日の個所は、そのような励ましを語る個所です。2つのことをお話します。

### 1：内容～出来ることをしたアリマタヤのヨセフ

十字架のイエス様が息を引き取られたのは、金曜日の午後3時でした。ユダヤの1日は日没(午後6時)から始まります。モーセの律法によれば、処刑された人の体が木につるされていたならば、その体はその日の内に取り除かれ、埋められなければなりません。ローマ占領下では、その律法は十字架刑に適応されました。しかし多くの場合、犯罪人は共同墓地に投げ入れられるのが関の山でした。それ以下の酷い扱いを受けることもありました。しかし、イエス様のお体をそのような惨めな取り扱いから救う人物が現れます。アリマタヤのヨセフであり、ニコデモです。ヨセフについては4つの「福音書」が全部紹介していますが、彼は金持ちで、最高議会の議員でした。ニコデモは、「ヨハネ福音書3章」で夜にイエス様を訪ねて来た人です。彼も最高議会の議員でした。

今日はヨセフを中心に学びますが、ヨセフはエルサレムの近くに墓を持っていたのです。彼はアリマタヤという所の出身でしたが、議員になってからでしょうか、その前でしょうか、エルサレムに移り住んで、やがて高齢になり、自分のために墓を造ったのでしょうか。「マタイ福音書」には「岩に掘って造った自分の新しい墓に(イエスのからだを)納めた」(マタイ27:60)とあります。通常、死体には香料と香油で埋葬の処置が施されますが、ニコデモが香料を30kgも持って駆けつけました。その香料で応急処置をして、イエス様のお体を墓に納めたのです。因みにイエス様の遺体に添えられた香料30kgという量は、王様を葬る時に使われる量に匹敵する量だそうです。そして「まだだれも葬られたことのない新しい墓」(41)です。それも特別なことでした。ヨセフとニコデモは、イエス様のお体を受け取って、ただ葬っただけではなく、謂わば、王として葬ったのです。最も目立つ方法で、イエス様との関係が一番疑われる方法で、見事に葬ったのです。

しかし、アリマタヤのヨセフは、なぜこのようなことをしたのでしょうか。38節に「…イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った…」(ヨハネ19:38)と記されています。彼は、どのような形であったのか、イエス様の弟子だったようです。しかし、弟子でありながら「ユダヤ人を恐れてそのことを隠していた」というのです。社会的な立場が邪魔して、表立って弟子としての活動は出来なかったのかも知れません。「ルカ福音書」は「この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった」(ルカ23:51)と言います。「議会で行われた『イエスの死刑判決』に賛成はしなかった」と言うのです。だからと言って、議会で反対を表明したり、反対演説をしたりしたのかと言うと、そうではなかったと思いま

す。議会は「全会一致」でイエスの死刑を決めているようです。彼は、心の中では反対を呟きながら、しかし何も発言しなかったのかも知れません。あるいは、判決に加わることを避けて、議회를欠席したのかも知れません。いずれにしても「命をかけてイエス様を守った」というようなことをした訳ではないのです。彼が反対表明でもすれば、イエス様の心は幾ばくかの慰めを感じたかも知れません。しかし、彼はそうしなかった。

しかしそれにも拘らず、4つの「福音書」には、ヨセフの行動を責める語調はありません。むしろ「美しい姿」として彼の行動を描いている印象があります。なぜでしょうか。それは、議会では反対することは出来なかったけれど、その後、自分の為し得る限りのことをしたからではないでしょうか。イエス様は、謂わば、ユダヤ社会全体から寄って集って十字架に架けられた人です。そのイエス様の死体を引き受けたのです。そのためには、ピラトにはっきりと「私はイエスの弟子である」と申し出なければならなかったはずです。さらに、自分の墓地を提供し、そこに葬ることは、きっと彼の社会的な名誉や地位を傷つけることだったでしょう。このことは公衆の面前で行われました。彼はこの後、周りの人から何と言われ、どのような取り扱いを受けたのでしょうか。いずれにしても、彼は犠牲を覚悟して、勇気を振り絞ってこのことを行っただけです。

なぜ彼は、このようなことが出来たのでしょうか。ヨセフは、イエス様に神性を感じていたのではないのでしょうか。心の中ではイエス様の弟子でした。こっそりとイエス様と接触していたかも知れません。しかし、彼にはそれ以上のことは出来ませんでした。失うものが大き過ぎるように見えたのかも知れません。そうしているうちに、イエス様の十字架を見上げる時が来たのです。彼は、恐らく十字架のイエス様の言葉を聞いたのです。「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)。「父よ。わが霊を御手にゆだねます」(ルカ 23:46)。「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)というのは、イエス様を十字架に掛けようとしている人々、イエス様を裏切った人々、そしてイエス様の弟子となっただけながら、従うことの出来ないヨセフのような弟子に対する赦しを宣言し、その人々の救いを祈られた言葉です。イエス様は、ここに及んでも「人への愛」と「神への絶対の信頼」に生きられたのです。十字架から流れ出てくる愛、十字架から流れ出てくる神への信頼、それが人間の業を越える業であることを、彼は理解したのではないのでしょうか。彼には復活は見えていません。十字架による救いも、この時点では見えていないでしょう。しかし、師と仰ぐ人の圧倒的な生き方を見て、またその人の神への信頼、自分への愛と赦しの言葉を聞いて、もう「隠れ弟子」でいることは出来なかったのです。

さらに「ルカ福音書」は、「この人は…神の国を待ち望んでいた」(ルカ 23:51)と記します。彼は、社会の不正に耐え難い思いをしながら、神の直接的な支配が始まることを待ち望んでいたのです。その彼に、イエス様の神様への信頼は、強烈な印象だったと思います。そして自分も「神の国」を待ち望んでいたからこそ、為し得る限りの正しさ、優しさに生きようとしたのではないのでしょうか。生前のイエス様を守ることは、荷の重すぎることでした。しかし「お体を葬ること」は出来ると思った。そこで彼は、自分の出来る範囲において犠牲的な行為を行っただけ、ということだったのでしょうか。さらにその彼を、聖霊が励ましたということもあったと思います。

## 2：レッスン～出来ることをする信仰生活

私達はこの個所から何を学ぶことが出来るのでしょうか。

先日、私は朝のデボーションをしていた時、「私の命はイエス様が代わりに死んで下さった命なん

だよな」という思いが迫って来ました。であれば、最後まで大切に生きて行きたいと思います。しかし、色々な弱さがあります。その私達を、ヨセフの記事は励ますのです。

前にもお話ししたと思いますが、カナダにいる時、私は、毎週月曜日は目が痛くて寝込んでいました。それでかかりつけのお医者さんに紹介してもらって、1か月待った後、バンクーバー市街地にある総合病院で検査してもらえることになりました。私達の住んでいたアパートから病院までは40kmくらいです。家を出て高速道路に乗ろうと思ったら、家から高速の入り口までの直線道が大渋滞しているのです。私は「予約の時刻に遅れる。遅れたら見てもらえない。また1~2か月待たなければならぬ」と思いました。焦った私は、もう1つ先のインターチェンジから高速に乗ろうと思って、別の道を目指してハンドルを左に切りました。その道だったらスイスイと車が動いているはずだったのです。ところが行ってみたら、そちらの道の方が酷い渋滞なのです。私は絶望的な気持ちになりました。ところが、「バカな判断をしてしまった」と嘆いている私の横で、家内は携帯電話で病院に電話をかけました。「道が大渋滞しているので到着が遅れます」。そうしたら受付の人が「大丈夫ですよ」と返事してくれたのです。私は「その手があったのか」と思いました。私の中には「予約の時刻に間に合うか、時刻に遅れて全部ダメか」、「0か100か」の二者択一しかなかったのです。しかし実は「10分、15分送れて行く」というより現実的な選択があったのです。

つまらない経験ですが、しかし私には貴重な経験でした。そしてアリマタヤのヨセフの姿と重なります。私達は、自分が願っているような理想的な信仰生活は出来ないでしょう。罪があります。弱さがあります。恐れもあります。失敗もあれば、人を赦せないこと、愛せないことも多いです。何かあると神に呟く不信仰もあります。悩みは多いです。しかし「だから私の信仰生活は全てダメだ」と思わなくて良いのではないかと思います。自分の弱さ、欠け、至らない面、それは現実です。神様に取り扱って頂かなくてはどうにもなりません。しかしその自分にも、信仰を働かせて出来ることあるのではないかと、「10分遅れ」のような形で出来ることあるのではないかと、そう思うのです。

奥田知志という北九州でホームレスの人々の自立支援の活動を続けている牧師のお話を聞きました。今までに1000人近い方々を自立に導いて来られました。しかし、先生がこんなお話をしておられます。例えばアパートを求めている人が100人いたとしても、しかし自分達の力だと5人分のアパートしか提供できない。この5人を誰にするのか。もしかしたら、5人の中に選ばれなかったために、数日後には死んでしまう人がいるかも知れない。先生はそこで「自分達の活動は、人を助けようとする活動なのに、その一方で人を死に追いやってしまう活動でもあるのではないかと悩むのです。でも結局、「自分達は罪人なのだ。罪人である自分達が罪を犯しながら続けて行くのがこの活動なのだ」と言い聞かせる場所に道を見出されるのです。もちろん先生方の活動は、私達には真似の出来ない素晴らしい活動です。でも「自分達は罪人なのだ。罪人である自分達が罪を犯しながら続けて行くのが…」という言葉に、私達も励まされる気がするのです。罪人である自分達が、弱さを抱えたまま、それでも何とか「神様に喜ばれるように」と拙い歩みを続けて行く、それが信仰生活ではないかと思うのです。ヨセフは、自分に出来ることをやりました。そして「福音書」は、そのヨセフの姿をむしろ良く描くのです。私達も、理想的な信仰者で在れないことを嘆くより、出来ることで小さい一歩を踏み出すことの方が、意味があるのではないかと思うのです。

スウェーデンのホテルで、女の子がロビーにあるピアノを滅茶苦茶な音を出して弾いていました。そこに父親がやって来て、女の子の演奏を止めるのではなくて、横に座って、女の子が出す音の合間を埋めるようにしてピアノを弾き始めました。そうしたら、女の子の酷い音と父親の演奏が合わさって素晴らしい音楽になったのです。この話を紹介している「アルファ」のガンベル先生は言いました。

「神が、同じように私達の下手な演奏—(欠けのある信仰の歩み)—を美しい音楽に変えて下さるのです」。

その時に大切なのが「神の国を待ち望む」ということです。繰り返しますが、ヨセフは「…神の国を待ち望んでい」(ルカ 23:51)ました。「神の国」、それは「神の支配」という意味にもなります。神の具体的な支配が見えないような世の中の動きです。身の回りにも試練があります。そこに神様の働きが感じられない時もあります。諦めに押しつぶされるように思うこともあります。しかしそれらは、決してそのまま終わるものではないのです。やがて、神の国が来る。やがて全ての問題に解決が与えられる時が来るのです。ある牧師が次のように言うておられます。「わたしたちはこの世界がこのままで終わらないことを信じています。神が御国を来たらせて下さることを信じています。だから諦めないのです。御国を待つ者にふさわしく生きるのです…」(小島誠志)。それは、この世界という大きなレベルだけでなく、私達の身の回りのことにも言えます。私達の身の回りのことにも、神の支配が来るのです。私達は、希望を持って、どんなに無力感に襲われようが、それでも自分に出来る信仰の歩みを続けて行くのです。

### 3. 終わりに

アリマタヤのヨセフは、自分に出来得ることをやりました。その彼に、神は何をして下さったでしょうか。彼の墓は、イエス様の復活の舞台となりました。その同じ墓に、ヨセフも身を横たえて眠りについたのです。彼こそが、正に「甦り」に対する、誰よりも強い希望と確信を持って眠りについた人であったと思います。彼にとって、墓は新しい意味を持つ場所となりました。墓は「甦り」へと続く場所になったのです。その希望は、私達にも与えられている希望です。主は確かに葬られました。でも甦られたのです。私達もやがて死んで葬られるでしょう。しかし主に在るならば、私達も甦ります。墓は甦りの場所になるのです。繰り返しになりますが、その希望があるからこそ、弱いながらも、神を待ち望み、現実的なレベルで、出来ることをしながら、慎ましい信仰生活を積み上げて行きましょう。主はそれを「良し」として下さいます。決して見過ごしにはされません。その小さな歩みを祝して下さい。